

MANTIE DIAOCHA BAOGAO

遼寧省檔案館 編

滿鐵調查報告

第三輯

15

QILIN NORTHERN UNIVERSITY PRESS
齊齊哈爾大學出版社



滿鐵調查報告

MANTIE DIAOCHA BAOGAO

第三輯

15

遼寧省檔案館 編

GUANGXI NORMAL UNIVERSITY PRESS
广西师范大学出版社

桂林



滿洲紡織業

滿鐵庶務部調査課 一九三三年十月

1

北滿洲電氣業

滿鐵哈爾濱事務所調査課 一九二五年一月

420



序 言

近來滿洲に於ける企業熱、特に紡績業に對する經營熱が勃然として起り遼陽、奉天を初め數ヶ所に其計畫を見るに至つた。此國に際して滿洲が紡績業に適するや否や、換言すれば滿洲の紡績業は將來果して有望なるや否やを調査する事は必ず徒爾ならざるを信するものである。本書は題して滿洲に於ける紡績業と云ふも眞の目的は即ち此の點に存するのである。然しながら筆者素より斯業に對して全然無智識なると、調査事務に經驗淺く且つは淺學小才なるを以つて完璧を期する事は到底不可能事たるを確信するものゝ方であるが、只幾分なりとも當地の經濟的事情を内地方面に紹介する上に於て助けともなれば筆者の満足之に過ぐるものはない。

滿洲に於ける紡績業なる題目の下に世界紡績業の大勢及日本斯界の實勢等を説く事は一見矛盾の如き觀あるも現時の紡績業たるや決して孤立的のものに非ず、世界的に相關聯する事極めて大なるを以つて滿洲に於ける斯業を研究するに當つても必ず世界各方面の狀勢を攻究せざるべからず、特に滿

洲とは極めて密接なる關係を有する日本の紡績業に就ては決して等閑に附する事は出来ない。如上の理由を以つて本書に於ても世界及日本斯業の現狀に就て數頁を割く事にせるも、其目的たるや既に以上の如きものあるを以つて其説くところ極めて概略に留めた事を御諒察願ひ度い。

終りに臨んで本書を編むに方り多大の御援助を賜はつた左記諸氏に對して茲に特記して深謝の意を表する。

滿蒙綿糸布商況通報社

中 根 泰 三 氏

滿洲織布會社專務

下 山 恭 次 郎 氏

東洋棉花株式會社

奥 正 助 氏

大正拾貳年八月

調査課

小 川 透

滿洲に於ける紡績業

目次

第一編 紡績業	一
---------	---

緒論

第一章 綿糸布の輸入状況	四
--------------	---

第一節 全滿洲の輸入状況	四
--------------	---

第一項 輸入數量	四
----------	---

第二項 輸入綿糸布の明細	六
--------------	---

第三項 綿糸布の外國貿易上に於ける地位	九
---------------------	---

第二節 日本品の輸入状況	一〇
--------------	----

第三項 輸入の沿革	一〇
-----------	----

第四項 輸入數量及綿糸布貿易上に於ける地位	二二
-----------------------	----

第二章 紡績業の現狀……………一四

第一節 世界紡績業の現狀……………一四

第二節 日本紡績界の現狀……………二一

第一項 沿革及發達經路の概況……………二二

第二項 最近の狀況……………二五

第三項 綿糸布の相場及採算……………三二

第四項 本邦綿糸布貿易と對支輸出……………三九

第三節 支那紡績業の現狀……………四六

第一項 支那本部の現勢……………四六

第二項 滿洲の現況……………六七

第一、輸入數量、主なる仕出國及輸入經路……………六九

第二、大阪方面よりの運送日數、運賃、關稅及其他の諸掛……………七二

第三、滿洲に輸入される主なる綿糸布の種類……………七六

第四、滿洲の土布製織……………八五

第五、各地の商習慣……………九〇

第六、支那人の性質及嗜好……………一九九

第七、各主要地に於ける主なる綿糸布商……………二〇一

第四節 生産費及相場……………二一一

第一項 生産費……………二一一

第二項 相場……………二一六

第三項 在支工場と内地工場との生産費の比較……………二二六

第五節 支那市場に於ける各國綿製品の消長……………二二九

第一項 英國品……………二二九

第二項 日本品……………二三三

第三項 米國品……………二三七

第四項 印度品……………二四九

第六節 日貨排斥と綿糸布に及ぼせる影響……………二四三

第三節 紡績業地としての遼陽、奉天、鐵嶺、金州等各

地の狀況……………二四六

第一節 遼陽……………二四七

第二節	奉天	一五九
-----	----	-----

第三節	鐵嶺	一六九
-----	----	-----

第四節	金州	一八〇
-----	----	-----

第五節	長春哈爾濱方面に於ける情況	一八六
-----	---------------	-----

第一項	長春方面及農安方面	一八六
-----	-----------	-----

第二項	哈爾濱方面	一九八
-----	-------	-----

第四章	計畫工場及既設工場の現況	二二五
-----	--------------	-----

第一節	滿洲紡績株式會社	二二五
-----	----------	-----

第二節	内外棉花金州分工場	二三三
-----	-----------	-----

第三節	南滿紡績株式會社	二三四
-----	----------	-----

第四節	福島紡績鐵嶺分工場	二三一
-----	-----------	-----

第五節	奉天紡紗廠	二三三
-----	-------	-----

第六節	滿洲織布會社	二三五
-----	--------	-----

第五章 滿洲に於ける金融狀況……………二四三

第六章 滿洲に紡績業の有望なる理由……………二七二

第一節 滿洲自體が既に綿糸布の大なる需要地

なる事……………二七三

第二節 勞銀地價及建築材料の低廉なること……………二七六

第三節 勞力の供給豊富なる事……………二八二

第四節 勞働條件の有利なる事……………二八五

第五節 動力の割合に低廉にして豊富なること……………二八七

第六節 種々課程上の負擔少き事……………二九一

第七節 關稅の保護を有する事……………三〇〇

第二編 原棉……………三三一

緒論

第一章 世界に於ける原棉の産額消費及相場……………三三二

第一節 産額……………三三二

第二節 消費……………三三四

第三節 棉花の相場……………三三七

第二章 支那に於ける原棉……………三三二

第一節 棉産國としての支那の地位……………三三二

第二節 支那に於ける原棉の消費……………三三九

第三節 支那に於ける原棉の輸出入……………三四五

第四節 棉花の取引状態及相場……………三五〇

第一項 取引状態……………三五〇

第二項 出廻状況及包装……………三五五

第三項 上海に於ける棉花相場……………三五九

第五節 滿洲の原棉……………三六五

六

第一項	產額	三六五
第二項	消費	三六九
第三項	品種及其用途	三七〇
第四項	出廻狀況	三七一
第六節	棉質及其改良	三七三
第七節	棉作に關する支那の諸政策	三九一
第三章	結論	四〇五

滿洲に於ける紡績業

庶務部調査課

小

川

第一編 紡績業

緒論

綿糸紡績業が有利確實なる事業である事は敢て吾人の喋々を得たざる所なるが、特に歐洲大戰後各國の秩序回復と共に綿糸布の需要は今後尙一層の激増を來すと見て差支なからう。然るに歐洲方面に於ては、數年に亘りし戰亂の爲各種事業は殆んど根本的に破壊せられ、之が回復には少くとも數年の星霜を要すべく、紡績事業の如きも其復舊又容易の業に非ず、従つて歐洲方面に於ける綿糸布の供給は當分現状維持と見て大過はない。米國の現状を見るに、同國は現在英國に次ぐ紡績國として我國の一大顯敵である事は勿論なれども、同國今後の生産増加は南米諸國及米國屬領地等に於ける消費の増進

と略相調和するものと見られるので、同國將來の生産増加も大體に於て未だ當面に於ける綿糸布の世界的需要に應ずる事は出来ない。斯くの如き狀況は本邦斯業の將來に對して動かすべからざる一大樂觀材料たるを失はないのである。

上述の如く、大戰に因る歐洲の生産減と輸出力の減退とは近年本邦斯界に大なる刺戟を興へ益々殷盛を加ふるの氣運に到達せしめたとは云へ、又一面本邦には物價の騰貴と勞銀の暴騰とを伴ひ、殊に將來彼の工場法適用さるゝに至らば夜業は全然之を廢止せざる可らず、加之勞働問題の發生等ありて近い將來に於ては其能率殆んど半減さるゝに至るであらう。其上尙支那に於ける關稅の引上、印度に於ける特惠關稅問題の發生等數へ來れば是等幾多の難關は本邦紡績業の將來に對して非常なる脅威と云ふべく、其方針に何等の改革を加へざるに於ては我國紡績業の運命は遂に内地に於ける綿糸布の供給のみを以て満足せざるべからざる境遇に陷るの止むなきに至るであらう。此に於てか廣大無邊の沃野を有し、且つ綿糸布に對し絶大なる消費力を有する滿蒙の地に進出するの最も策を得たるものたるを思はない譯には行か

ない。由來支那は世界有数の綿製品需要國にして、四億の大人人口を有し其殆んど九割は綿衣を着用し、我國綿製品輸出總高の八割強は即ち支那に輸出せらるるの狀勢にある。一方翻つて支那に於ける斯業の狀態を見るに、近來其發達稍顯著なりと稱するも、尙之を同國の偉大なる消費力と對比せば紡績業發展の餘地綽々たるものがある。然るに從來本邦資本家にして此地に投資して、直接施設を爲すもの少きは特に吾人の遺憾とせしところなるが、最近内地企業家にして當地に着目し、紡績業の滿洲進出を計畫するもの輩出するに至りしは遲滞ながら甚だ喜ばしい現象である。即遼陽に富士紡系の滿洲紡績株式會社、金州に内外綿花の分工場、奉天に東亞拓殖株式會社の南滿洲紡績株式會社、鐵嶺に瀋陽紡績の分工場等の計畫を見るに至つたのは理の當然にして、寧ろ今まで一も計畫されなかつたのが不思議に堪えないのである。

第一章 綿糸布の輸入状況

第一節 全滿洲の輸入状況

第一項 輸入數量

支那に於ける綿糸布は輸入品中の大宗にして、大正十年度に於ける全支那綿糸布輸入總額は、綿糸百廿七萬三千四百三十八擔、綿布一千三十七萬九千八百二十一疋に上り、其需要は支那人口の増加に供ひ益々増進の傾向がある。

又十一年度に於ける滿洲輸入綿糸は卅六萬二千百一十一擔、其價額千六百〇九萬〇百〇八海關兩にして、戰前大正二年の四百六十二萬六千八百十二海關兩に比すれば實に千百四十六萬三千二百九十六海關兩の増加にして、又綿布に在つては大正十一年が四千九百七萬八千五百四十八海關兩、大正二年が二千二百七十萬六千二百九十七兩にしてこれ又二千六百三十七萬二千二百五十一兩の激増を示してゐる（大正二年度の北支那貿易年報に數量が示されて居らざるため數量上の比較を採り得ざるは甚だ遺憾である）。以上の比較は單に價額上の比較なるが故に、戰爭前よりも物價の高騰せる大正十一年の方が

輸入價額の多いのは當然の理なれども、數量上の増加もこれに依りて略推知し得られると思ふ。

今試に最近五ヶ年間に於ての滿洲輸入綿糸布數量を示せば次の通りである。

最近五ヶ年間に於ける南滿洲大連、營口、三港輸入高(北支那貿易年報に依る)

年次	綿布	數量		糸額
		數	價	
大正六年	二九、四九一、二六九 靜岡南	三二〇、一八二 關	七、一四七、二五四 靜岡南	
大正七年	三五、五一七、九七六	一七〇、九四二	八、二二二、〇六二	
大正八年	五四、〇六七、六九三	二五七、三九六	一三、五二五、三四六	
大正九年	五〇、〇七九、五四三	二二二、六〇八	一三、三六五、九七一	
大正十年	四六、三四七、八二六	三三四、一九〇	一六、六五九、〇七四	
大正十一年	四九、〇七八、五四八	三六二、一一一	一六、〇九〇、一〇八	

以上の表に依つて見るも、大正十一年に於ては大正六年に比し、綿布は價額